シリーズ「共に成長する」⑥互いに教え合う　　コロサイ 3 章 16 節

聖書は私たちが成長するためには教師となって互いに教え合い、互いに戒める（この場合は助言、アドバイスを与えるという意味で）ことが大切であると言っています。しかし、それは聖書についてどれだけ知っているか、説明が出来るかあるいは神学的に解説が出来るかということだけでなく、どうすれば身近な人を愛することが出来るのか、赦すことが出来るのか、賢明な決断をすることが出来るのか？　どうすれば与えられた責任を最後まで果たせるのか？　そういった経験を分かち合うことも教えることになります。その時に大切なことは学ぶ者、聴く者の姿勢です。他のクリスチャンが自分の人生に起こった神のみわざについて話す時にその話にじっくりと耳を傾けながら、その人の中におられるキリストがその人の人生にどう働かれたかについて注目して聞くことは大切です。そうすると聞いている者は恵まれます。共に主を褒めたたえたくなります。喜ぶ者と共に喜ぶことが出来、悲しむ者と共に悲しむことが出来ます。

今日の聖書箇所は私たちが共に成長するためには互いに教え合い、学びあうことが大切であり、そのためにはどのような過程をたどってゆくかを教えてくれています。つまりクリスチャンになっても自動的に成長してゆくわけではないということです。もちろんそれは立派なふるまいや人をあっと言わせるような事をすることではありません。神様の私たちに対するみこころは私たち一人ひとりに神様はご計画をお持ちであり、この地上の生涯を通して神様の恵みとご真実を、救われたことの素晴らしさを味わってほしいと思っておられるからです。今日の聖書の箇所から成長するために「互いに教え合う」ということを見てゆきたいと思います。もう一度今日の箇所を読みます。

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。　コロサイ 3 章 16 節」

① キリストのことば

まず、私たちが教えることが出来るためには、自分自身がみことばを理解しておく必要があります。最初に出てくる「キリストのことば」とは何でしょうか。「の」ということばにはいろんな意味があります。まず「キリストの」を「キリストが」という意味に取ると、「キリストのことば」とは「キリストが語られたことば」という意味になります。しかしそれだけではありません。旧約時代の預言者たちはキリストについて数多くの預言を書いていますが、ペテロ第一 1:11「彼らは、自分たちのうちにおられるキリストのみ霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。」ここに聖書の預言は預言者たちのうちにおられたキリストの霊が、あらかじめ預言者たちにことばを授けたのであると言われています。つまり、旧約聖書もまた、キリストが預言者たちをとおして語られた「キリストのことば」であると言うことです。さらに新約聖書は使徒たちのことばですが、それもまた、「キリストのことば」です。キリストが地上で語られたことばといえども、キリストご自身がそれを書き遺されたわけではありません。キリストの直接のことばといわれるものもまた、使徒たちが、主が語られたことばを思い起こして書いたものです。しかし、使徒たちに、キリストのことばを思い起こさせたのは、聖霊ですから、使徒たちを通して語っておられるのもキリストです。ですから、新約聖書もまた「キリストのことば」なのです。ヘブル 1:1-2 に「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、み子によって、私たちに語られました。」とあります。神はキリストを通して語り、キリストは

使徒たちを通して語られたのです。ですから、「キリストのことば」とは、キリストが直接語られたことばだけではなく、聖書全体を意味するのです。

「キリストのことば」には、また、「キリストについてのことば」という意味があります。「キリストの」を「キリストを」という意味にとれば、聖書は「キリストのことば」とは「キリストを語ることば」ということになります。聖書の全体は、そこで「キリストが語っておられることば」ですが、同時に、聖書の全体は「キリストについて語っていることば」です。主イエスが「聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）と言われたように、聖書はキリストを指し示す、キリストを主題とした書物なのです。

ですから、「キリストのことばを住まわせる」というのは、聖書をそこでキリストが語っておられるものとして読むこと、また、聖書の中にキリストを見出すように読むこと、そしてついには聖書を通してキリストに出会うということになります。聖書は、どんなふうに読んでも役に立ちます。しかし、聖書は、キリストに焦点をあてて読むまでは、それを正しく読んだことにはなりません。聖書からキリストを取り除いたり、キリストを脇に置いたままでは、聖書を「キリストのことば」として読んでいることにはならないのです。

② キリストのことばをあなたがたのうちに住まわせるということ。

住まわせるとは「中に」ということばと「家」ということばが組み合わさって出来たことばで、「誰かといっしょに一つの家に住む」という意味になります。日本語的に言えば、「ひとつ屋根の下に住む」ということになるでしょうか。家族が一緒に生活する親密な関係を描くことばです。聖書では、このことばは、神が信じる者たちとともにいてくださることを表わすのに使われています。コリント第二 6:16 にこうあります。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」これは、すべてのものの造り主、最も聖なる神が、弱く罪あるわたしたちと共に、ひとつ屋根の下に住んでくださるという約束です。そんなありえないことを、イエス・キリストは実現してくださいました。神は、キリストを信じる者に「わたしはあなたの神、あなたはわたしの民」と言ってくださり、わたしたちが神に「あなたはわたしの神、わたしはあなたのもの」と言うことができるようにしてくださったのです。キリストのことばが私のうちに住む時、それは神と共に生きているということです。この喜びを味わいたいと思います。ローマ 8:11 には、「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方のみ霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるみ霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」とあって、聖霊が、信じる者の霊のうちに宿ってくださっていることが教えられています。聖霊が、時々訪れてくださるというのではなく、新約時代の今は、聖霊は信じる者の霊とともにいてくださり、そこに住んでくださるというのです。

同じローマ 7:17–20 では「わたしのうちに住む罪、住みついている罪」ということばが繰り返されています。これも住むということにおいてはキリストのことばを住まわせると同じことばが使われています。今度は「罪」ですから真逆な意味で罪が人の内面に「住みついて」あるいはこびりついて離れない様子が表わされています。パウロは全ての人が持っている罪、そこから出てくる罪の力はこびりついて離れないことを言っています。ですから、これを書いた使徒パウロは「わたしは、ほんとうにみじめな人間です」（ローマ 7:24）と嘆いているのです。しかし、この嘆きは、勝利の歓声にかわります。なぜなら、イエス・キリストを信じる者には、罪にかわって聖霊が共に住んでくださる、聖霊が「住みついて」くださるからです。

主イエスはヨハネ 15:7 で「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」と言われました。主は「わたしのことばがあなたがたにとどまるなら」と仰って、みことばを心にとどめているなら、キリストにとどまっていることができると教えてくださいました。わたしたちが「キリストのことばを住まわせる」とき、キリストはわたしたちのうちに住んでいてくださるのです。この喜びは何ものにも代えがたいものです。

みことばは、それを読まなければ、書物の中に、紙とインクのままとどまっているだけで終わります。それを読んでも、心に受け入れなければ、頭のどこかにかすかな記憶として残るだけです。また、心で受け入れたとしても、それを実行に移さなければ、みことばの力を体験することは出来ません。みことばに問題があるのではありません。教会に問題があるのではありません。それをどのように受け止め、信じて歩むかどうか私たちの歩みにかかっているのです。またみことばに対しそのように向かい、心に住まわせ、行動しなければわたしたちの人生に聖霊の実、またみことばの実という良い実を実らせることができないのです。

聖書を読むことについて八木重吉はこのようなことを言っています。「この聖書（よいほん）のことばを/うちがわからみいりたいものだ/ひとつひとつのことばを/わたしのからだや手や足や/鼻や耳やそして眼のように感じたいものだ/ことばのうちがわへはいりこみたい」聖書がわかるということは、聖書の中に「自分」が見えてくることだと言えます。しかも、悩み苦しみをひきずりながら、段々と自分が見えてくると言えるのではないでしょうか？　キリストのことばを住まわせていると自分が無くなるのではなく本当の自分が見えてくるのです。

③ キリストのことばを用いて互いに教え、助言する

運動でも、勉強でも、毎日、コツコツと続けることが大切なように「みことばを住まわせる」のも同じです。毎日の積み重ねがあってはじめて、「みことばに導かれました」、「みことばに励まされました」、「みことばに教えられました」、「みことばに満たされました」という体験ができ、そうした証しが生まれてきます。ペテロ第一 2:2 には「生れたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」とあります。「みことばを住まわせる人」は、「信仰の成長」という素晴らしい祝福を受けます。また、ひとりひとりが「キリストのことばを豊かに住まわせる」とき、そういう人たちが集まる教会は豊かなまじわりを築くことができます。今日のコロサイ 3:16 で「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ」と言われている中にある『あなたがた』というのは、「教会」を意味します。「知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め」というのは、教会のまじわりを、「詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」というのは教会の礼拝を指しています。教会に集う者ひとりひとりが「キリストのことばを豊かに住まわせる」とき、教会にみことばが宿ります。そして、そこから「知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め」あい、成長していくまじわりが生まれ、「詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌う」真実な礼拝が捧げられるようになるのです。ですから「最高の礼拝を捧げましょう」という時に礼拝の内容も大切ですが、礼拝とは私たちの信仰生活のあり方そのものが表現される時でもあるということです。もう少し平たく言えば、どのような礼拝になるかは礼拝に出席する時点でほぼ決まっているとも言えます。

人間は神を礼拝するために造られました。どうかキリストのことば、聖書をよく読み、みことばを心に住まわせ、みことばによって教えられ、みことばによる交わりが祝福され、主の前に良き礼拝を捧げることを目指したいと思います。